

ウォーミングアップ その14

学習指導案を書く際の注意点を考える

指導案に良く見られる事例から指導案を書く際のポイントを確認する。

◇ よくある事例（1）～評価計画と目標が異なる指導案

○題材名「調和の良い食事を考えよう」

○指導と評価の計画

学習項目		関心・意欲・態度	創意工夫	技能・表現	知識・理解
1 食事のとり方を考えよう	2	・食品の栄養的な特徴や食品の組み合わせに関心をもっている。			・食品に含まれているいろいろな成分の体内での主な働きにより、食品をグループに分ける分け方を理解している。
(本時2/2)					・ <u>栄養的に調和がとれるよう、食品を組み合わせるときの必要性を理解している。</u>
		(以下略)			

○本時の目標

様々な食品を組み合わせる朝食の献立を作ることができる。

これは、「指導と評価の計画」に書かれている評価計画と、本時の内容が一致していない例である。評価は目標が達成されたかどうかを検証するものであり、本来なら評価の内容は目標と整合しているはずである。

この例では本時は、全2時間で行う学習「1 食事のとり方を考えよう」のうちの2時間目であるので、評価計画によれば本時の評価は「栄養的に調和がとれるよう、食品を組みあわせてとることの必要性を理解している」ことができるよう指導する「知識・理解」をねらった時間のはずである。

しかし、上の例の目標は「技能」をねらったものになっている。

したがって、本時は評価計画にある「栄養的に調和がとれるよう、食品を組みあわせてとることの必要性を理解する」という目標が設定されるか、または逆に評価計画が目標に合わせて変更される必要がある。

○評価計画は各時の目標に対応しているもの。評価内容と目標を整合させること。

◇ 良くある事例（２）～主体のねじれた文末表現

○題材名「調和の良い食事を考えよう」

○指導と評価の計画

学習項目		関心・意欲・態度	創意工夫	技能・表現	知識・理解
1 食事のとり方を考えよう (本時 2 / 2)	2	・食品の栄養的な特徴や食品の組み合わせに <u>関心をもつ</u> (b)。 [授業中の観察]			・食品に含まれているいろいろな成分の体内での主な働きにより、食品をグループに分ける分け方を理解している。 [ワークシートの記述]
					・栄養的に調和がとれるよう、食品を組み合わせるときの必要性を <u>理解している</u> (a)。 [ワークシートの記述]
(以下略)					

○本時の目標

栄養的に調和がとれるよう、食品を組みあわせてとることの必要性を理解している (a)。

(知識・理解)

この例では、下線部(a)においては、評価計画と本時の目標は対応している。しかし、目標はその時間の子どもの学習目標を記述するものであり、評価はその目標が達成できたかどうかを指導者が検証する項目である。そのため、内容は同じであっても文末の表記は異なってくる。

従ってこの場合、本時の目標は、文末が「・・・必要性を理解する」が適当である。

また、評価規準は、その単元・題材の目標を達成するために、各時間にどのような力がつけばその時間の目標が達成できたと考えるのかを示したものである。下線部(b)においては、その記述が子どもの学習目標を示した表現になっている。子どもの姿を示す評価規準は、「・・・に関心をもっている」「・・・を理解している」という文末表現になる。

その上で、その姿をどのような方法で見取るのかを文末に併せて [] のように記述しておく、全体の評価計画がより具体的なものとなる。

○目標はその時間に子どもにつけたい力、評価はそれがついたかどうかを指導者が確認するための項目。文末表現に気をつけて記述する。

◇ よくある事例（3）～ねらいが混合した目標設定

○題材名「調和の良い食事を考えよう」

○指導と評価の計画

学習項目		関心・意欲・態度	創意工夫	技能・表現	知識・理解
1 食事のとり方を考えよう (本時1/2)	2	・食品の栄養的な特徴や食品の組み合わせに関心をもっている。			・食品に含まれているいろいろな成分の体内での主な働きにより、食品をグループに分ける分け方を理解している。
					・栄養的に調和がとれるよう、食品を組み合わせるときの必要性を理解している。
		(以下略)			

○本時の目標

食品の栄養的な特徴に関心を持ち、食品をグループに分ける分け方を理解している。

この例では、本時の目標が、「関心・意欲・態度」と「知識・理解」の二つの観点を一文にして表記されている。このような表記だと、実際の指導でもねらいが不明確になりやすい。

評価計画では、それぞれの観点到分かれて評価規準が書かれているため、目標も観点到別に2つ記述した方がわかりやすく、指導計画が立てやすくなる。

○複数の観点到混在した目標は指導もあいまいになりやすい。観点到ごとに分けて記述し授業のねらいを明確にする。

◇ よくある事例（４）～立場が錯綜した活動内容

○本時の展開

活動内容	(分)	生徒の活動	教師の指導と支援
1 本時の学習内容の確認	5	・自分の1日の献立を作成することを示す(a)。	・食品群別摂取量の目安の表のページを確認する(a)。
2 食品群別摂取量の確認	10	・給食分析で行った群別をワークシートで確認し、食品群ごとに不足している重量を計算する(b)。	・給食分析で行った群別をワークシートで確認させ、食品群ごとに不足している重量を計算させる(b)。
		(以下略)	

これは、「本時の展開」の記入において良く見られる例である。

下線部(a)では、生徒の活動と教師の活動の立場（主体）が錯綜した表現になっている。

上記のように、子どもの立場と教師の立場が並列して書かれている形式の場合は、「児童・生徒の活動」または「教師の指導と支援」の欄をそれぞれ下へたどって行けば、**子どもの活動あるいは教師の動きが時系列に見通せる内容**になっている必要がある。

下線部(b)では、生徒の活動の裏返しをそのまま教員の活動として記述している例である。

このような表記は、授業の流れが見にくくなるばかりでなく、**生徒の活動に対して教師がどのような視点を持って関わるのか**が示されておらず、授業の仮説としての指導案になっていない。

本時の展開を記述する場合は、まず子どもの動きを具体的にイメージして時系列に記述し、**それぞれの活動について教師がどのように必然性を持って指導あるいは支援して関わっていくのか**が明確な記述にすることが重要である。

○本時の展開の記述は、まず児童・生徒の活動を時系列に記入していく。その後、それぞれの活動に対応した教師の動きや関わり方のポイントを、指導上の留意点や支援策として記述していく。